

# こころやの志

## 圓覺の卷

### 前篇

釈尊の精練……………	一	聖き命の糧……………	一一
身体も精神も鍛練を要す……………	四	大円鏡の頌……………	一五
法蔵菩薩發願偈……………	六	十法界……………	一六
地藏菩薩……………	九	後篇	
		正信偈……………	二三
		円覚經……………	二八

### 釋尊の精練

何人も思ふだらう、釋尊は精神としては實に大悟徹底古今獨歩の靈力を有つても心の靈的にか成惡魔外道邪惡の輩をも降伏摧破し給ふ威神力が有とするも、御身體は本王宮にあり、數多の姝女に傳かれ宮中色味の間に保養せられしことなれば、體力としては寒熱等の自然の刺激に對しては逆も抵抗するまでの筋骨の鍛練はでき居らぬならんと思ふが、實は然らず。

佛陀は王宮を出て山に入りて苦行外道さへも及ばざる體苦の苦行を敢行し、風雨寒熱にも能く凌ぎ、安忍し得るほどに鍛練し給ふてをる故に、體力の強剛なるまた鍛練したる。

是に就て或人の曰く、釋尊の如き生れ乍らの大聖者が山中に六ヶ年の長時間修行なされたと云ふが、恐らく五六ヶ月にして大悟なされたらうと。然り然りと雖も修行は

必しも心靈の悟道のみではない。身體共に完全に鍛練修習するには六七を要す

とおもふ。全體人間の身體の細胞組織なるものは、常に新陳代謝して七年にして骨髄に至るまで悉く變換するといふ。之で見れば身も心も共に充分に鍛練修習せんに

六七年を要すべきである。然らば今、念佛者が教祖の如くに彌陀の光明を容れて其靈光に薰染して四百兆の細胞悉く彌陀の心光に薰染して身心全體彌陀の所有と爲る

若し此身と心とが全く彌陀の有となれば、彌陀は即ち我有である。されば釋尊の御身も心も、生理機體乃至全體を循環する血液も呼吸もまたすべての分泌物までも、

心生活の全部を完全に彌陀の靈力に研かれて、彌陀の靈力靈光に此器械が愉快に運動する。爰に至り始めて人天師と爲つて大千世界を震動し一切衆生の導師の靈的人格者である。

若し全くミオヤの聖意を會得して我は子である、親と子との間に身心共に血が通ふて居る時は、我等が身心共に親の物である。教祖は此の彌陀の光明を容るべき器と成るべき模範を示し給ふたのである。

彌陀の光明を受たる光明靈化の程度

大宗教家としての釋尊は彌陀の光明を人格に實現なされて一切の衆生の模範を示しなされた。衆生が其模範に則り、一心に念佛して彌陀の光明を獲得したなれば、

何人も釋尊と同じく全く完全圓滿なる人格と成り得らるるものであるかと問はゞ、否然らず、彌陀は圓かに照し給へども受くる人の方にて階級なくてはならぬ。

今此世界に於て、圓滿の月は釋尊のみにて文珠彌勒は十四夜の月にて各宗の祖師の如きは十二三夜の月にて、未だ毫も信仰の光明得ざるものは晦月の如くである。而

して彌陀の光明の眞理を初めて獲得して信心の始めて喚起したるは即ち新月である

いかに佛教を聞き念佛する人も、未だ信心實に得ざる間は晦月である。またいかに人は世智辨聰なるも、彌陀の光明を得ざる間は、人生が闇路を辿つて、闇より闇に入る盲目的生活と云はねばならぬ。何人も人と生れたる上からは、ミオヤの光明を得

て生の覺醒に入らねばならぬ。而して光明の中に向上の一路の人生と悟り、一歩一歩に進みて、月の一夜々々に満月に進むやうに信仰の生活に入りて初めて、ミオヤの子たる自覺である。故に光明の生活には、新月より満月に至るまでの行程はある。何人も光明を得て眞に意義あり。月の一夜々々に進むやうに生活する人を意義ある價值ある生活と名づくべきである。然らば光明の獲得したるすがたは吾人の主義として説く處である。

### 人類は身體も精神も鍛練を要す

信仰に入れば此心が彌陀の光明に靈化せられて、生れ化つて麗はしく成る計りではなく、此身體の各部も同じく彌陀の心光に充さるれば玲瓏と赫々快々と運轉すべき器なれば調練をしないでならぬ。

宗教的に使用せらるるほどの高等なる靈妙なる身心なれば、他の動物とは大に異つてをる。他の動物は本能的に、馬は馬牛は牛の性のまゝに少しの訓練もさるゝ事はない。人の身體各機能は調練を要することは、人間は高等に進化してをるからである。例へば鑛物でも磁石杯は球磨を要せぬ天然のまゝが還て其素朴なる處に風致あり、然れども高等なる寶石や水晶等は球磨せなくては其性に有てをる光輝が放發せぬ。人類は身體精神共に高等に發達す。故に寶石杯と同じく充分に練習せなくては完全に使用できぬ。殊に此身心が最靈妙なる彌陀の靈光を容るる器としたら彌陀の靈的電氣を以て運轉さすべき機關とするには、彌々鍛練しなくてはならぬ。

教祖釋尊は御生得三十二相の骨相が備はり、完全無缺の形體を有し給ふが故に、身體の腦髓神經より筋骨皮肉のすべての生理機體が充分に精練鍛治し給ひ、五根等の機能も能く調練し淘治し給ひ、宗教家としての釋尊の靈體は、實に彌陀の靈光を容納すべき聖體で在すなり。

彌陀の靈應を安置する聖體である。

### 法藏菩薩發願偈

こがねのみかほいや巍く  
聖旨に輝くみひかりは  
あかねさす日もさやかなり  
摩尼寶石の射通るも  
如來のみすがた妙にして  
正覺のみこゑいや高く  
戒と聞と精進根に  
威徳たぐらふものもなく  
歸きが上にいやあけく  
際なき際をきはめては  
神聖と正義あらたにて  
圓かに備ふる靈格は  
功勳はいよよ高くして  
光威はますくおごそかに  
我も作佛のあかつきは  
生死の海を渡りては  
徳てふ徳は残りなく  
布施と調意と戒と  
吾誓ふらく作佛まで  
すべての恐惶の者のため  
まよふ數多のみ佛が  
あらゆる寶をあつめては

そなふ陵威は極みなし  
世にたぐふべき物もある  
月の光りも地の上の  
墨のごとくに消えぬなり  
すべてに超えて勝れます  
ひよき渡らぬ限もなく  
三まやと智慧の花ひらき  
殊勝さあやに賢けれ  
佛の法の海に入り  
底なき底に照り通す  
やみとけがれのあともなく  
神徳の極みなかりけり  
智慧の深さぞ底ひなく  
天と地とにひよきます  
いまの佛のごとくにて  
解脱の岸にいたらなん  
修め盡さん至誠に  
忍と精進を鍛練には  
己が望をつとめては  
慰藉と平和を施さん  
數へもつきぬ聖等に  
心つくしの供養より

まことの道を求めては  
 譬は恒河の沙ほどの  
 光明普く照しては  
 いさみすくみて道のため  
 己が作佛の國土をば  
 あらゆる珍奇を盡しては  
 無爲洄泥のみやこには  
 我はずべてを憐みて  
 あらゆる衆生我國に  
 光榮と幸福に充されて  
 幸はくは我みほとけよ  
 此の誓願を遂げんため  
 あらゆる佛陀のさへられぬ  
 いまよりちかひ献げたる  
 獄火に焼かれいかばかり  
 いさみすくみて退かず

地藏菩薩

歸命頂來地藏尊  
 極樂淨土彌陀如來  
 迹を此土に垂れ給ひ  
 たやすく我等を救はんと  
 六八のちかひを立てたまふ  
 我も正覺取らじとの

向上みゆくこそ勝るなれ  
 諸佛のみ國は限なくも  
 至らぬ限もなきまでに  
 威神は量りがたなくも  
 すべてに超えてならびなく  
 道場ひとり勝るなれ  
 たぐふ界もなきまでに  
 救ひつくしてのこりなく  
 到らばたれもおしなべて  
 圓かに徳を符せしめん  
 己か至誠を照しませ  
 己をいまは献ぐなり  
 智慧もて己を照しませ  
 此の身はたとひ奈落かの  
 苦毒の中に止むとも  
 忍んで終に悔いざらむ

仰いで本地をたづぬれば  
 衆生濟土の爲にとて  
 法藏はさつとへり下り  
 五劫に思をこらしては  
 もしも願ひのはたさずば  
 ちかひも遂に成就して

いまは淨土に安住し  
 いかなる衆生もま心に  
 かならず助けたまふなり  
 心のやみの深くして  
 一子をおもふなさけより  
 地藏はさつと名のらせて  
 生死の海の慈悲の船  
 この世後の世もろ共に  
 苦を抜き樂を與ふるは  
 いかなることも御名を呼び  
 ミオヤをたのみてまかすれば  
 のちには淨き淨樂の  
 四八の相のうるはしく  
 上なきさとり身とならん  
 南無や本地の彌陀如來

聖き命の糧

譬へば日々の糧に依り  
 靈き食を享けてこそ  
 彌陀甘露の靈食は  
 法身慧命永しへに  
 不老不死の靈體を  
 五大の形は借りぬれど  
 六根常に悅豫し

十方世界を照します  
 御名を稱へて念すれば  
 さりとば知らで我々は  
 苦海にさまよふ憐れさま  
 正覺已前のみすがたに  
 無佛世界を引導す  
 浮べてすくふたのもしさ  
 たすけ給ふぞありがたき  
 菩薩の慈悲にましますば  
 たのめばねがひは遂るなり  
 此世は無比の幸を得ん  
 華の都に生れては  
 六通自在の徳を得て  
 唯願くば地藏尊

今此の形骸を扶持つ如と  
 聖き生命は保つなれ  
 靈を養ふ糧にして  
 實に在して滅せざる  
 釋迦牟尼佛と現はれし  
 神は即ち佛なり  
 姿色はいつも清らけく

光顔殊にいかめしく

世尊は定慧究暢して

不死の靈渣享けぬれば

彌陀甘露の靈渣は

我等世尊の教を得

佛法味をば愛樂し

有漏の依身はかはらねど

諸根は常に悅豫し

法喜の妙味極みなく

喜樂神に潤はへば

彌陀法界身なれば

甘露の食に養はれ

法身慧命永しへに

○

彌陀の御園は（ ）あり

濁けば盤若の漿をのみ

一切莊嚴法を説く

七覺華咲匂ひ

無量ぼさつを朋となし

彌陀の心水を沐がれて

忽ちにして法界に

斯はのどけきみやこにぞ

のどけき極りなき處

○

威容替らせ給はざる

聖意は彌陀と融合し

神色永はに潤ふるれ

普ねく法界に滿くぬ

常恒念佛の身となりて

禪三昧を食とせば

神は靈き生命にて

姿色も自づと清らけく

禪悅靈感不思議にて

身心共に安らけし

我等も彌陀の分子なり

三世諸佛と等しける

在して滅せぬ命なり

○

佛と衆生の所感なり

無生を飲んで飢るなく

聞けば自づとさとらるゝ

八背に神を澄しける

性海如來は皆師なり

觀音勢至は衣を與ふ

遊びて（記）を授にける

いま去らずしていつをまつ

聖き御名をいひ

おもひを寶の池に入り

心明く清けく

（輕安我を覺えず

觸るれば輕く安かに

味ふ時は美しく

○

如來清淨法界を

衆生所感の穢土ながら

自ら五濁の世と見るも

法界盡して悉く

如來在す所はみな

淨土といふはいと淨き

如來在さぬ所なく

如來は四智の日は明く

衆生は自分業識の

各々自業の所感にて

喻へば我らは闇の夜に

狭き闇黒室に栖みて

生命と爲して轉……………

三昧にこゝろすましては

神を八つの水にすみ

潤ひてかぐはしく

涼しく

涼しく輕らかに

衆生は不淨の國と感じ

如來は寂光土と感ず

衆生は無明と感ずより

佛陀は清き心より

清淨國土ばかりなり

淨土にあらざる所なし

如來の在す所なり

いづ所も全く淨土なり

十方界に照りわたたり

阿賴耶所感の現境を

六道身心異にす

自分感阿賴耶なる

自業の油を燈火の

色心二象はことごとく

### 大圓鏡の頌

十方三世一切の

色心二象はことごとく

如來一大觀念の  
色心共觀のます鏡  
兩觀互に碍りなく  
一たび曇りて頼耶識の  
磨きて照すます鏡  
大圓鏡智に契ふとき  
圓かに照す日の前に

(十 法 界)

天地萬の物はみな  
體より産出たる理を知らば  
たとへば工畫師の  
六凡四聖とかはれども  
倒にかゝりて絶間なく  
人道に迷ひ理に戻り  
有財無財の餓鬼てふは  
財と五欲に飢渴き  
形は人に似たれども  
正なる人道を横さまに  
傲慢擧高胸にみち  
天をも畏れで人を侵し  
人には仁義の倫ありて  
義務は國家の目的に  
博く愛して人のため

鏡の影像に外ならず  
表と裏とに映り徹り  
圓かに照さぬ處なし  
己が影のさまなくも  
照さぬ隈やなかるらん  
淨穢の色心  
絶對同時のすかたなり

本一大法身の  
人の心の根底は深し  
種々のすがたを描く如と  
一つこゝろの造るなれ  
たけき炎に焦るゝは  
邪見非道の報とや  
肉慾我慾が病的に  
飽こと知らぬぞ卑しけれ  
心は禽か獸かは  
行衛の果やいかならん  
偽善と偽徳に名を銜ひ  
憐るあそらの面にくし  
社交は互に仁慈やり  
力を竭すは人なれや  
我身を犠牲にさゝげては

世界に福を興ふるは  
小聖は四諦の理を觀じ  
三明六通具はりて  
獨り靜かに坐をしめて  
無明生死の夢さめて  
ぼさつはちかひの海深し  
二利圓滿の天廣く  
佛陀は三身圓かにて  
智慧の光照しては  
無明は六の凡路なり  
九界にかゝる雲晴れて  
佛法を外に求めざれ  
宇宙一大真我なる  
理性の啓示に無明さめて  
靈應交感妙して  
事相は内容無盡なり  
かゝる真理をさとりなば  
目的に(一)よりて

○  
天地よろづの物はみな  
發現なりと識るときは  
たとへば巧な畫き師は  
六凡四聖とかはれるも  
倒に懸りて間もなく

天つ人及國つ神  
無我は宇宙を我となせば  
無爲の都にすみ遊ぶ  
因縁無生の理をさとり  
縁覺涅槃はすゞしけれ  
上求菩提下化衆生  
同體大悲の極みなし  
法身在の處もなし  
八相應化の迹高し  
覺醒れば一如の天きよく  
本覺如來の界のみ  
自己の心の本源の  
無限の光壽に歸命して  
天真自性は顯はるれ  
内容無盡(一)の  
無限の莊嚴示さるゝ  
宇宙の真心を心とし  
各天職に力を竭さん

法身如來藏性の  
人の心の根底は深し  
さまゝ姿を繪す如と  
一つ心や造るなれ  
たけき炎に焦るゝは

人道に逆らひ理に戻り  
 有財無財の餓鬼てふは  
 たからと五慾を貪りて  
 形は人類に似たれ共  
 正なる人道を横さまに  
 己れ慢より他を威し  
 天を畏れず他を侵し  
 仁義禮智の倫ありて  
 義務は國家の目的にとて  
 博く愛して人類の爲め  
 世に幸福を興ふるは  
 小聖は四諦の理を觀じ  
 神通自づと具はりて  
 獨りしづかに座を占て  
 無明の死の夢さめて  
 ほさつは誓の海深く  
 一切衆生を我身とし  
 佛陀は三身圓かにて  
 智慧光遍く照しては  
 無明は六のやみぢなり  
 九界にかゝる雲はれて  
 佛法を外にな求めそよ  
 宇宙一天眞我なる  
 智光の理性開くれば

殘酷非道の報いとや  
 肉慾我慾の惡弊症  
 重き罪惡造るより  
 情操は禽かは獸かは  
 歩む行衛はいづこそや  
 偽善偽徳の名を銜ひ  
 憐る阿修羅の面にくし  
 社交は互に仁恕り  
 力を竭すは人なれや  
 我を犠牲に献けては  
 國つ神かや天人か  
 無我は宇宙を身となせば  
 無爲の都に栖みあそぶ  
 因縁無生の理をさとり  
 緣覺涅槃に入りぬらめ  
 菩提を求め衆生を度し  
 同體大悲の極みなし  
 法身在さぬ處なく  
 八相應化のあと高し  
 覺醒は一如の天清く  
 本覺如來の日は明し  
 己が心の源もとの  
 無量光壽に歸命して  
 天真自性は顯はるれ

事相は内容かぎりなく  
 かゝる真理をさとりなば  
 最終真理の目的に

無比の莊嚴啓示さるゝ  
 宇宙の心を心とし  
 參はり天職を力めかし

(親鸞聖人正信偈)

無量壽如來に歸命し  
 法藏菩薩因位には  
 諸佛淨土の國と人  
 無上殊勝の願を建て  
 五劫に思惟し攝受して  
 普く無量無邊光  
 清淨歡喜智慧光  
 超日月光塵刹を照しては  
 本願名號正定業  
 等覺涅槃を證するは

不可思議光に南無し上る  
 世自在王の所にて  
 善惡纒妙を觀見して  
 希有の弘誓を超發し  
 誓つて名聲十方に聞しめん  
 無碍無對光炎王  
 不斷難思無稱光  
 群生光照蒙りぬ  
 至心信樂の願により  
 必至滅度の願による

如來世に出玉ひしは  
 五濁惡世の群生は  
 一念喜愛を發すれば  
 凡聖逆謗も廻入せば  
 攝取心光照護ては  
 貪愛瞋憎の雲と霧  
 日光雲霧に覆はるも  
 獲信見敬慶喜せば  
 一切善惡凡夫人  
 廣大勝解の者と云ふ  
 彌陀の本願念佛は  
 信樂受持を難しとす  
 印度西天の論家  
 大聖興世の意を顯し  
 釋迦如來楞伽山  
 龍樹大士世に出で、  
 大乘無上の法を説き  
 難行陸路は苦なれ共  
 彌陀本願を憶念し  
 常に如來號を稱し  
 天親菩薩論を説き  
 修多羅に依りて眞を顯し  
 本願力の廻向にて  
 功德寶海に歸入せば  
 唯彌陀の願を説き  
 如來如實の言を信じ  
 煩惱ながら涅槃を得  
 衆水一味の海に歸す  
 無明の闇を破しぬれば  
 眞實信の天を覆ふ  
 雲霧の下は明き如と  
 横に五惡趣を截ち  
 如來弘願聞信し  
 是人を芬陀利華と名づく  
 邪見僞慢惡業生  
 難の中に彌々難  
 中夏日域の高僧等  
 如來の本誓應機を明なり  
 衆に告げます南天の  
 能く有無の見を破し  
 初地を得安樂に生せん  
 易行の水路は樂なりき  
 自然に即時に必定に  
 大悲の恩を報すべし  
 無碍光如來に歸命し  
 横超誓願を光闡す  
 度生の一心を彰し  
 必ず大會の數に入り

華藏世界に至りては  
 煩惱林に遊びては  
 本師曇鸞梁天子  
 流支に淨教さすかりて  
 天親菩薩の論を註  
 弘願の回向は他力にて  
 感染凡夫信發し  
 無量光明土に至れば  
 道綽聖道難しとて  
 萬善自力を貶しては  
 三不三信慳慳に  
 造惡弘誓に値ひぬれば  
 善導獨明佛正意  
 光明名號の因に縁り  
 行者金剛心をうけ  
 韋提と等しく忍を得て  
 源信一代を開きては  
 專雜執心淺深に  
 極重惡人唯稱佛  
 煩惱目を障へ見へねども  
 本師源空教に明  
 眞宗を片州に興し  
 生死轉廻に迷へるは  
 寂靜無爲に入る事は  
 眞如法性身を證し  
 生死の國に化を示す  
 常に菩薩を禮しける  
 仙經を燒き樂邦に歸す  
 報土の因果を顯はせり  
 正定の因唯信心  
 生死が涅槃と證知せん  
 諸有皆普く化するなり  
 唯淨土にのみ通入す  
 圓滿德號稱へしむ  
 像未法滅同じく  
 安養界にて妙果を得  
 定散逆惡あはれみて  
 本願智海に入りぬれば  
 慶喜の一念相應し  
 法性常樂證すなれ  
 一切を安養に歸せしむ  
 報化の二土を辨立し  
 我が攝取の中にあり  
 大悲常に我を照  
 善惡凡夫を愍みて  
 撰擇本願世に弘む  
 疑情を以て所止となす  
 信心を以て能入とす

弘經の大宗師等  
道俗ともに同心に

(圓覺經)

是にて彌ろく菩薩は

佛足を頂禮し

世尊よ菩薩と衆生等

輪回の本を斷べくは

佛菩提幾等階位

幾種か方便設けては

世尊は彌勒に告給ふ

諸菩薩と三世衆生の爲め

微妙の義をば請問す

衆生に輪回を斷たしめ

諦に開け當に説かん

輪回の本

善男子よ衆生無始よりも

輪回し一切種性

皆婬欲に因り性命

欲ある故に愛性を

欲は愛に因る生命

愛命は欲に依る

欲境に由り違順

種々業を造から

善惡果報

無邊極惡を拯濟し  
高僧説を信すべし

大衆の中より坐を立ちて

長跪叉手して白すらく

如來寂滅海に入る

輪回に幾種性ある

塵勞に立入りて

衆生を濟度いたすべき

善男子よ汝等能く

如來深奧秘密なる

ぼさつに智慧の眼をきよめ

實相無生を悟らしむ

彌勒と大衆は默然として聽

恩愛貪欲あるが故に

胎卵濕化の四生等

輪回は愛を根本とす

助長し生死相續す

欲に因り有り衆生

愛欲は因愛命は果

愛に背きて憎嫉し

地獄餓鬼とは生すなれ

肉の欲は卑きをしり

捨惡樂善を因として

たとひ高等なる愛も

四禪定捨世樂の

善惡苦樂

生死輪回を出んには

變易ぼさつが世に出

但慈悲方便の力にて

末世の衆生欲を捨て

如來圓覺を求めなば

衆生貪欲に本づきて

五性差別と顯はれ

二障は理事の二にて

事障は生死を續かしむ

五性

衆生本來圓覺性

二障未だ斷じ得ず

先づ貪欲を捨事障を除くも

二乘に入りて

衆生如來圓覺

二障已に伏しなば

事理の障斷滅し

菩提と及び大涅槃

一切衆生悉く

高等なる業道に

天と人とは現るれ

尙賤して愛をすて

有爲増上の樂果をう

輪回にて聖道ならす

貪欲愛渴除くべし

愛より生ずるものならず

愛欲假りて生死に入る

憎愛除きて輪回を(斷)

清淨心にて開悟をう

無明を發揮するに由り

二障深淺現はるゝ

理障は正知見を礙へ

暫く五性と差別す

未だ成佛せざるほどは

未だ理障を斷せずば

菩薩の境に位を得ず

證を欲せば發願し二障を斷じ

菩薩の境に悟入せん

如來圓覺に入

満足するところ

皆圓覺を證するは



知識に逢て所作

修習に頓漸有りぬれど

菩提正修行路に過

衆生佛性有すれど

外道種性に陥るは

斯く種々縁により

菩薩大悲方便は

種々形相逆順の

同事同情感化し

無始清淨の願力に

衆生大圓覺に於て

常に菩薩の清淨の

我今佛圓覺に

外道及び二乗の

依願修行漸く

願滿解脫清淨の

大圓覺妙莊嚴城を證せん

是にて清淨慧菩薩は

佛足を頂禮し

大悲世尊よ我が爲

未だ曾て見聞せざりし

願くは諸來法衆の爲

衆生と菩薩と如來との

因地法行に依り

若しも如來の無上

(根に大小)ふもなく成就す

邪見知識に遇ふとき

師の過にて

五性差別と名づくなり

世間に入りて未悟を開

境界示現し給ひて

成佛せしむはみな

依りてなり

増上心を起しなば

大願發して斯は言べし

任して知識を求めて

値ふことなくして正く

諸障を斷じ障盡きて

法殿に登

大衆の中より座を立ちて

長跪叉手して白す

廣く不思議の事を以て

善誘を蒙り益を得ぬ

法王圓滿覺性と

證得差別を聞まほし

三二

末世衆生聖教を

世尊は淨慧に告給ふ

汝菩薩と衆生と

請問す諦に聞け

淨慧菩薩は奉聽

善男子圓覺自性

起も取もなく證もなし

いかにとなれば菩薩と衆生は

幻化すでに滅すれば

譬ば眼は眼を見ず

迷倒幻化を除きえぬ

妄に功用の中に

寂滅隨順うるときは

衆生無始より妄我と

自ら念々生滅しらぬ故

若しも善友に教をうけ

起滅の眞理を發明せば

人あり勞慮永く斷ち

彼淨解さへ障なれ

此を凡夫が隨順

菩薩は見解を礙と爲

見覺住すもまた礙

隨順覺性と名くなれ

照あり覺あり皆障礙

聞て隨順悟入せん

善哉々々

如來漸次の差別を

汝が爲に説示せん

大衆默聽し奉つる

非性性有性に循ふ

實相中には菩薩衆生なし

皆幻化なり

證を取るものなどあらん

性自平等自爾なり

はどこそ滅と未滅

便ち差別は顯はるれ

寂息も寂滅者もなし

愛我に由て曾て

憎愛起して五欲に(耽著)す

淨圓覺性悟り得て

生性息を知らん

法界淨をうる時は

圓覺自在ならざる

覺性とは名つく

たとひ解礙は斷すも

是を菩薩の未入者の

故に菩薩は常に覺に

三三

住せず照と照者と

同時に寂滅

譬ば人が自ら首を断ぬれば

首断つ故に更に影なし

礫心を以て諸礫を滅し

礫已滅滅礫者なし

教は月指す標の如し

月見る時は所標は非月

如來種々の言説は

菩薩に示すも亦如是なり

此を菩薩の入地者

隨順覺性とは名く

一切の障礙即究竟

覺得失念みな解脱

成法破法も皆涅槃

智愚も通じて般若と爲

菩薩外道皆菩提

無明真如無異境

定慧淫怒痴俱是梵行

衆生國土一法性

地獄天堂皆淨土

有性無性齊成佛

一切煩惱として

畢竟解脱と悟るべし

法界海慧は一切の

相を照了して虚空の如し

此を如來隨順

覺性と名く

當に知るべし衆生

曾て無數の佛菩薩

供養し徳本植しもの

是人一切種智を成すと爲

是にて威徳自在菩薩

大衆の中より坐を立ちて

佛の足を頂禮し

長跪叉手して白

大悲世尊は我ため

隨順覺性分別し

菩薩覺心佛の教にて

修習に因らず善利をう

世尊は譬ば一大城

四門諸方より來るもの

一路に止まらず

菩薩修行も一方便に非

世尊は廣く一切の

漸次修行人すべて幾種と

此會の菩薩と衆生

大乘求もの速に開悟

如來大寂滅海に

遊戯せしめたまひ

世尊は威徳に告給ふ

善哉々々

汝等諸菩薩と末世の

衆生の爲に是方便を問

善男子無上妙覺

十方に徧し如來を

出生し一切法と同體

修行實二あるなし

隨機方便數無量

所歸を攝て性差別

三種なり

淨圓覺性悟せんに

善男子よ菩薩身中の

種々の念を澄むに由り

淨覺心を靜にし

諦に覺することを得ん

分別識煩動も

身心客塵妄なりと

靜慧發生する時は

内寂靜輕安覺ゆべし

明く照せば妄滅て

十方世界如來心

心靜寂なる故に

鏡中影像の如くなり

行者の心は顯現し

諸縁を止めて寂靜なり

此方便を奢摩佗とて

覺心及び根塵も

次に菩薩圓覺を悟りて

始覺の幻智を起しては

淨覺心をもて

八萬塵勞幻衆生

皆幻化に因ると知る

本根不覺の幻を除く

諸幻を變して幻を開く

變化し如幻の衆生を開示し

本根不覺の幻を除く

起幻して本來自他に

起幻して本來自他に

幻に怨親なきをしり

幻に怨親なきをしり

自他本來一にして

幻の生死に怖れず

定力輕安暢達し

菩薩は此より行と證

彼幻を觀するものは

非同幻觀ごとごとく

幻相永く離れ

土の苗を長すと

善男子菩薩

淨覺心にて幻相と

身心皆罣礙と爲

尙進みては觀の幻化と

身心皆是礙と爲ては

靈明の體は絶對にして

受用世界も身心も

永く超過

自然に寂滅輕安發し

自他身心

定慧等

此三法は皆圓覺に

十方如來此により

一切菩薩是により

假令百千萬億の  
此圓覺無礙の法を聞

幻の佛果を食らす

漸次に佛道増進し

幻に同するものに非ず

皆是幻の故に

菩薩の所圓妙行は

此を三摩鉢提と云

淨圓覺を悟らんに

及び靜相取せず

前靜相とに取せず

眞理は知覺なく

碍無礙を超絶し

(相在塵域)

煩惱涅槃留礙せり

妙覺隨順

衆生壽命も皆浮想

此方便を禪那と爲

親近隨順門なり

已に成佛し給へり

皆圓覺を證成す

二乘の行を成せんより

一念修習に如かざらん

是にて辨音菩薩

佛足を頂禮し

大悲世尊よ

妄の三觀方便に

大衆の爲に願くは

世尊辨音に告玉ふ

能く大衆と及び末世の

修習の門を問にけり

善男子一切の如來の

修習と修習者はなけん

便ち二十五種

菩薩區々に

靜力に由り煩惱を

靜力により煩惱を

座を起すして涅槃をう

若唯如幻を觀しては

備に菩薩の妙行を

寂念靜慧失はず

若唯諸幻を滅には

斷盡して實相を

淨諸業相菩薩は

大悲世尊よ願くは  
如來因地の行相を

大衆の中より坐を起ちて

長跪叉手して白

法門甚た希有とす

圓覺門に幾修あり

方便開示し實相悟しめ

善哉

衆生の爲に圓覺の

諦にきけ説示せん

圓覺本より清かに

なれども未覺幻力もて修習には

清淨定輪あり

唯寂靜のみ取り

斷して入寂

永く斷して究竟し

是を單修奢摩佗の人とす

佛力を以て世界種々作し

行して陀羅尼に於て

此を單修三摩鉢佗とす

作用を取らず煩惱を

證すを單修禪那と爲

我等が爲に不可思議の

説て大衆に示し給へ

歷劫を経て功をつみ  
 調御むかし歴劫に  
 妙果の相を炳然と  
 世尊若し覺心が  
 何の染汚に因りて  
 唯願くば我等が爲  
 此二衆と衆生  
 世尊は淨諸菩薩に告給ふ  
 能く大衆の爲  
 一切衆生無始よりも  
 壽命を有と執し  
 此にて憎愛二境となし  
 本來庵妄の體なるを  
 二の妄  
 妄業にあるにより  
 妄と迷の心より  
 また妄に涅槃を見る  
 之に由れりる清淨覺境に  
 本來覺の能入の  
 自分を迷ふて  
 故に動念及び息念も  
 無始より本起の無明が  
 衆生慧目なきなり  
 譬ば人あり自命を斷たざる如

勤苦功をつみ顯はせし  
 現はし給ふ  
 本性清淨ならば  
 衆生と迷悶入らざらん  
 法性を開悟せしめ給ひ  
 將來の眼を作しめよ  
 善哉々々  
 如斯方便を問  
 妄に我人を衆生と  
 顛倒認めて實我とす  
 重ねて實と執し  
 相依り妄に業道  
 妄に流轉を見る  
 流轉を厭ものは  
 入ること能はず  
 人を遠拒むにあらす  
 覺せぬなり  
 皆迷悶に歸るなれ  
 己が主宰と爲るにより  
 身も心も此無明

我愛を主義とするものは  
 隨順せざれば憎惡す  
 無明を養ひ相續

我に順隨  
 憎愛により  
 道を求めて皆成就せず

昭和六年四月二十五日印刷  
 同 四月二十八日發行  
 誌代年貳圓(郵税共)  
 編輯兼 山崎 辨成  
 發行人 山崎 辨成  
 東京市小石川區小日向臺町三丁目  
 印刷人 春山 治部左衛門  
 發行所 ミオヤのひかり社  
 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
 振替東京六八五一番